感秋林（原晩唐姚倫の作）　嘯月奄主人

赤根さゞ　東の方を　眺むれば　みどりの林も
もみじして　うつろふ秋の　いと深く　落つる木の葉れ
音しげく　梢にかゝる　鳥の巣も　さみしき影の
ものすごく　すみたる空に　飛ぶ雁の　羽さへ見へて
秋の夜の　月に驚く　鳥かや　嗟霜のあした
吹く風も　長閑けき春や　匂ふ日も　代りゆくなる
世のためし　榮枯の夢の　さてもあさまし

返歌

吹く風にちまたしく秋ともみじばは香ひ榮へし春れ花かな

病褥中に諸學友の屢來訪せらるし厚情に感じて　鳴鶴

かねてより深き情は知までなから猶こそ見ゆれかゝる折には

又　同

幾千尋ろこひ知られぬ渡津海もこかしとそ思ふ君ろ心に

歳暮　同

日毎〳〵事のいろきにろこすまにいつしかきぬるとしの暮かな

白虎隊

外員　杉村英夫

（三重韻）

一

名も岩しろと聞くからに　城は巖（いはほ）に幾春も　榮ゆる色の若松と
思ひこそすれ遠永に　誰か嵐の吹くそとも　知らむや變る色なると
さはいへ月も烏玉に　變るや秋の霄のくも　昨日千歳の色れゐと
今日はこちふくさ嵐に　消ゆるは悲し知るとても　是や浮世の習そと

二

はや傾きし旗のいろ　かへす力もなく人の　涙よ染みて枯生初めし
色若松の守りしろ　いざ言寄せん敷嶋の　櫻は胸に小夜あらそ
散りてかばしき花のいろ　吹かはしるきや白河の　關の守りは曉（あけ）のはし
消えて越路の空のいろ　雪うと紛ふ幾萬の　敵は二手に旗しるし

三